

子ども の涙

ある在日朝鮮人の読書遍歴



徐
京
植

キョン
シク

徐 京 植 (ソ・キョンシク)

1951年 京都市に生まれる

1974年 早稲田大学文学部フランス文学科卒

現 在 一法政大学と立教大学で非常勤講師 (現代アジア思想)

著 書—『長くきびしい道のり』(影書房), 『皇民化政策から指紋押捺まで』(岩波ブックレット), 『私の西洋美術巡礼』(みすず書房), 『「民族」を読む』(日本エディタースクール出版部)

編訳書—『徐兄弟 獄中からの手紙』(岩波新書)

共訳書—白楽晴著『知恵の時代のために』(オリジン出版センター)

子どもの涙 ある在日朝鮮人の読書遍歴

1995年3月10日 第1刷発行

著 者 徐 京 植

発 行 者 渡 邊 周 一

発行所 柏書房株式会社

〒113 東京都文京区本駒込 1-13-14

Tel. 03-3947-8251 Fax. 03-3947-8255

郵便振替 00130-2-5234

印 刷 享有堂印刷所

製 本 協栄製本

© Suh Kyung Sik 1995

Printed in Japan

ISBN 4-7601-1139-5 C0095

子どもの涙

ある在日朝鮮人の読書遍歴

徐
京キョン
植シク

ムリーリヨの少年 まえがきにかえて

十年あまり前のある日、暗い心で放浪の旅を続けていたわたしは、ロンドンの美術館で一人の子どもに出会った。子どもといっても、十七世紀スペインの画家バルトロメ・エステバン・ムリーリヨが描いた絵の中の子どもである。愛らしい幼な子の宗教画で知られるムリーリヨは、同時に民衆の日常生活を題材にした世俗画を多く残した。彼が好んで描いたのは、貧しくはあっても生き生きとした、いたずら好きな子どもたちの姿である。わたしが出会ったのもそのような子どもたちの一人である。

タイトルをみると〈A peasant boy leaning on a sill〉とあった。

ああ、勉強しているんだな。——そう思った。

貧しい少年には、ペンも紙もない。敷居が机がわりだ。それでも少年は、先生か年寄りの話に夢中で耳を傾けているところなのだ。

少年はかすかに笑っている。ひとつひとつ憶える文字と言葉。見知らぬ遠い国の歴史

や風物。むかしの合戦や恋の物語。——知識の光が少年の頬を明るく照らしている。陽光と雨とを浴びて樹木が伸びるように、知識が少しずつ増えていくことそのものが少年の飲み込みである。

だが、よく観察すると、その微笑はひもじさや悲しみを我慢しているためのようにも見えるのだ。

ご飯はちゃんと食べたのか？ 両親はどうしているのか？ 兄弟や友だちはいるのだろうか？ どんな人生が彼の行く手に待ちかまえているのだろうか……。

あれこれと想像をめぐらしているうちに、わたしは、しばらくの間、子どもだけのもの不思議な力によって、心を苛み続けていた憂鬱と不安とを癒されたのである。

旅を終えてからも、ロンドンから持ち帰ったその絵の複製を寢室の壁に架け、ときどき心のなかで少年に言葉をかけた。「どうした？ 何だか元気がないぞ」とか、「聞いてくれよ、きょうはいいことがあったんだ」とか。

そんなふうにして数年も経ってから、ふとした拍子に、あることに気づいて笑いだしてしまった。わたしはずっと *leaning* を *learning* と読み違えていたのだ。少年は「勉強している」のではなく、ただ「窓の敷居にもたれている」のだった。勝手な思い込み



「少年」 バルトロメ・E・ムリーリョ

で勉強と結び付け、あれこれと想像をめぐらしていたわけである。

どうして、あんなふうに思い込んでしまったのだろうか？

子どもの頃のわたしは本を読むことは好きだったが、定められた勉強は嫌いだった。そのことを、とても苦にしていた。どうやらいまだに自分は子ども時代の強迫観念からのがれられずにいるらしい。——そう考えると可笑しさがこみ上げ、それに誘われるように、長い間憶い出すこともなかった子どもの頃の情景が次々に心によみがえてきた。よみがえる心象風景のひとつひとは、不思議なくらいに書物の記憶と結びついている。いまも時折、散逸をまねがれて本棚や押入に残っている古い本を手にとってみることもある。落書きや手垢に汚れたページを繰っていると、子どもの頃の歎びや哀しみの感情までが胸底でざわざわと騒ぎ始める。成長への憧れとおそれ、自負と劣等感、希望と失意とがはげしく交錯した、あの日々。

子どもの涙

目次

ムリーリヨの少年 まえがきにかえて 3

思春期の戸口にて 『寺田寅彦集』 13

子どもの涙（一） エリザベス・ルウィズ『揚子江の少年』 27

子どもの涙（二） ニコライ・バイコフ『偉大なる王』 38

子どもの涙（三） エーリッヒ・ケストナー『飛ぶ教室』 50

豆を煮るに 吉川英治『三国志』 67

いやな奴 太宰治『思ひ出』 82

男について 『現代詩人全集』ほか 96

読めなかった本

トーマス・マン『魔の山』……………113

希望とは

魯迅『故郷』……………130

廃滅せんとする言葉（一）

許南麒『朝鮮冬物語』……………145

廃滅せんとする言葉（二）

金素雲編訳『朝鮮詩集』……………157

橋をわがものにする思想

フランツ・ファノン『地に呪われた者』……………170

あとがき

……………185

装丁 石田 博美

子どもの涙

ある在日朝鮮人の読書遍歴

思春期の戸口にて

『寺田寅彦集』

子どもの頃に読んだ本のうちで異様なまでにくっきりと記憶に残っているのが、寺田寅彦の随筆集である。人生で最初に読んだ本らしい本と言ってもいい。

もっとも、現在容易に手にはいる岩波文庫版で読んだのではない。数日前、押入れの奥をしつこく探してみたところ、われながらよほど捨て難かったとみえ、驚いたことにその本が残っていた。三十年ぶりに手にとってみると、子ども向けにルビをふり挿し絵などもあしらったもので、書名は『寺田寅彦集』となっている。版元はポプラ社。初版は一九五八年だが、わたしのものは翌年に出た第二版である。「私たちはどう生きるか」という全二十巻のシリーズの第二巻で、巻末の広告を見ると第一巻は吉野源三郎、三巻以下には、谷川徹三、天野貞祐、亀井勝一郎、小泉信三などが続いている。だが、わた

しが持っていたのは寺田寅彦のものだけであつた。

「最初」と言つたけれど、正確に言えば、もちろんその時までにも結構本を読んでいた。ただ、それはみな童話かいわゆる児童書だった。

在日朝鮮人の家庭に多かれ少なかれ共通することだと思ふが、わたしの父母は子どもたちが本を読んでさえいれば喜んだ。本を買ふと言ひさえすれば、ほとんど無条件に小遣いもくれた。父は自称高等小学校中退だし、母ときては、その生涯に学校の門をくぐつたことがなく、一字無識という有り様だったのだが、そうであればあるだけ余計に子どもたちへの期待が強かつたのであらう。その母は、後に五十歳を過ぎて読み書きを手習ひし、わたしが子どもの頃に親しんだ『孫文伝』（小田嶽夫著、偕成社版偉人物語文庫）などを読むようになってわたしを驚かせたのだが、そのことはまた別の話になる。

そうでなくとも、武よりも文を尊ぶ伝統的価値観に拘束されている朝鮮人にとっては、「読書」や「知識」というもののもつ価値は断然たる重みをもっている。「誰それは知識がある」というのが最上の賛辞であると同時に、「無識なやつ」というのが教育のない人々の間においてさえ最も強烈な悪口なのである。

ハルビン駅頭で伊藤博文を射殺した安重根アンジュンはいまも民族の英雄として尊敬されてい

るが、彼が旅順監獄で書き残した多くの書のひとつに、有名な「一日不讀書／口中生荊棘きよく」というものがある。処刑を待つあいだも一日でも本を読まなければ口の中にトゲトゲが生えるようで我慢ならないと言うのだ。彼は蛮勇の人ではなく、知性の人なのである。こういうところが朝鮮の大衆の琴線に触れるのだろう。

火の車のように忙しかったり貧しかったりしたときも、わたしの父母が、とりわけ母がつねに読書を奨励し続けたことには、わが子の「出世」を望む親心があったのは当然のこととしても、ちょっと大げさに言くと、こういう朝鮮民族としての文化的背景のよきなものの働きもあったに違いない。

＊

わたしが通った小学校は京都市内西部の下町の一隅にあり、かつて日本が朝鮮を植民地支配した時代に、そのあたりの電鉄工事に朝鮮から労働者を連れてきた関係で、わが同胞も多く住んでいた。たしか一クラスに四、五人ずつは朝鮮人がいたと思う。当時、一九六〇年代前半の人々の暮らしは、まだまだ貧しかった。給食費をもって来ない生徒が何人かいたし、積立金が払えない、着ていく服がない、家事を手伝わなければならな